

Title	宗教研究における記述的理解 : 真如苑を事例として
Author(s)	秋庭, 裕
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/1605
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	あきば 秋庭 裕
博士の専攻分野の名称	博士 (人間科学)
学位記番号	第 18135 号
学位授与年月日	平成 15 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	宗教研究における記述的理解—真如苑を事例として—
論文審査委員	(主査) 教授 直井 優
	(副査) 教授 木前 利秋 助教授 山中 浩司

論文内容の要旨

本論文においては、現代日本における代表的な新宗教教団である、宗教法人^{しんじようえん}真如苑を事例として取り上げ、包括的な記述を特色とする研究を行った。

真如苑は、宗教社会学的にいくつかの理由から、魅力的で、かつ戦略的に重要な宗教教団である。第一に、高度経済成長期以降、他の大多数の宗教教団の教勢が伸び悩む中で、ひとり真如苑が成長を継続していること。その勢いは、70年代においては、年10%の割合で、また80年代においては年20%の割合で成長を継続した。なおまた90年代以降も教勢は伸長を続けている。この理由とメカニズムを社会学的に解明することが、本研究の当初の課題であった。

第二には、今日も「霊能」や「霊能者」が、教えのなかで重要な役割を果たしていることである。世俗化論が宗教社会学の主要パラダイムであった時期、宗教教団においても呪術からの脱却こそは、成熟の証左であった。しかし、成熟し、近代化、合理化をとげた宗教教団が、社会的に威信ある制度的教団宗教として公式化し、その結果、苦難の現場からも撤退してしまったのであった。それは、救済の実効の減衰を意味したのではないだろうか。真如苑を事例として、教えの制度化、合理化と呪術の共棲関係を見究めることは、21世紀における日本宗教の行方を考えるとききわめて重要であると思われる。真如苑は、モダン型の宗教教団と、どこで何が分岐するのか、これを解明することが第二に派生した本論文の課題となった。

日本の宗教社会学研究において、インテンシブな新宗教教団研究自体、その数は（そして質的にも）、あり余るほど充実していると評価することは困難であろう。ことに真如苑の研究は、その発展の時期からしても後発組であったためか、研究蓄積は乏しい。したがって、本研究において必要なデータの収集は、ほとんど自前で調査を実施し調達しなければならなかった。しかし、この事情は、逆に本研究のオリジナリティを高める方向に寄与したかもしれない。本論文自体は、個別の教団研究の範囲に終始しているから、一般性の高い新規のモデルや理論を提起するには到っていないが、収集したデータの分析と解釈には、必要な創意を凝らすなど、これまで宗教社会学の分野ではあまり見られなかった方法を試みた。

宗教を社会学的に研究することの難しさは、宗教の核心をなす「聖なるもの」に対し、科学が直接に切り込むことができないことに由来するだろう。科学が立脚する合理的、客観的な方法によって、「聖なるもの」を測定したり評価することはできないからである。

本論文においては、「聖なるもの」という、科学が直接言及できないリアリティを記述するために、社会学や人類学、宗教学における、メタファーやアナロジー、さらには、モデルや理論を動員し、教徒のリアリティを再現できる

ような文体を試みた。真に優れた、モデルやメタファーやアナロジーは、教えのリアリティを損なわず、それを生き活きと再現する「依り代」となる力能をもつであろう。また、本来実践がなければ理解できない信仰のリアリティは、そのような「依り代」を介することによって、私たちは近似的にのみ理解することができるだろう。

「聖なるもの」が立ち現われるリアリティに接近するために、それらの「依り代」を援用しながら、「濃密で」(C. ギャーツ)、「開かれた」(U. エーコ) 記述を試みた。宗教という、科学が直接言及できない多面的なリアリティは、そのように幾重にも、また角度を変えて記述する以外、私たち研究者は接近できないのではないだろうか。

以上のような第1章での方法論的検討を承け、第2章においては真如教えの確立の歴史を、実際に多角的に記述し分析した。その中心は、真如霊能の特質の分析である。ここでは、B. アンダーソンのナショナリズム論を援用し、霊能とそれを支える霊界、またそれによって可能となる接心^{せつしん}と霊言という、真如教えの「聖なる」中心を隠喩的に記述した。

第3章では霊能者に対してのインタビューを、物語論的な枠組みで分析し解釈した。第3章自体は質的な分析ではあるが、霊能者に対し実施したアンケート調査の計量的分析の結果をふまえている。ここでは物語論を、計量的分析結果と照らし合わせることで、従来は試みられることのなかった方向に議論を発展させた。それは、P. リクールの物語論を下敷きに、「ミメシスⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を計量的な分析に利用可能なモデルとして提唱したことである。

終章の第4章は、真如教えにおける「救い」とは、どのように理解することができるかということと、本論文が戦後の宗教社会学研究のなかで、どのような位置にあり、持ち得るとすればどのような意義を有するか検討した。要約すると、本論文は特定の新宗教教団の研究として、あまり前例のない集約的な研究であること。第二に宗教を理解し、記述するための方法論的および理論的な提起がなされていること。この二点において、オリジナルな試みが含まれていることを研究史のなかで位置づけた。

最後に、本論文が真如苑の民族誌として読まれるとき、それはたんに真如教えの理解にとどまらないだろう。今日、真如苑になぜ多くの信者が集うのかを理解することは、ふだんはなかなか気づかない、現代日本社会における宗教的心性を理解することにつながるだろう。現代日本における活力ある宗教教団が生み出している、「救済」とは何であるかを理解することによって、宗教教団とは全く関係なく世俗を生きる人びとも共有する、日本社会の基層的、伝統的、文化的社会意識の現代の様相を観察することができるのではないだろうか。

論文審査の結果の要旨

本論文においては、非合理的な側面を持ち科学が歩みにくい宗教を、社会学として記述する新しい方法と文体が、宗教教団真如苑を対象に試みられている。教団の歴史が濃密で開かれた文体によって詳細に記述され、信徒の信仰史が物語論を下敷きにしたモデルにそって記述される。

それによって、教団の内から教えを語る篤信者のリアリティが生き生きと再現され、従来の宗教研究に見られる対象として宗教を突き放した見方ではなく、宗教的な教えを内在的、共感的に理解することが踏み込んで行われておりながら、なおかつ学問的な客観性も失っていない。

本論文は、新宗教の教団研究としては稀少な極めてインテンシブな研究であり、また宗教を理解し、記述するための方法論および理論的な提起がなされている点が高く評価されるモノグラフである。

以上から、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するに十分であると判定した。